つくばエキスプレス沿線整備と新川耕地・周辺特別委員会

行政視察　報 告 書

日本共産党　小田桐たかし

■Ｈ２６年１０月２２日　福岡県志免町～人口増加におけるまちづくり～

福岡市及び福岡空港に隣接した人口４万５千人、行政面積８．７ｋ㎡の町が、全国でも人口増加がトップレベルであることから、インフラや人口急増地域における課題（学校、保育園、自治会加入）を中心に視察した。

●感想

本市は、９５億円も出資したＴＸがＨ１７年に開業し、市内３駅の設置等を背景に人口が増加している。しかし志免町は、福岡市への人口集中による外的要因にが大きい。

一般的には、区画整理もせず、外的要因での人口急増は、街の姿をいびつにしてしまい、下水道、道路、ゴミ収集など生活に欠かせない基本問題で課題が山積し、住民の不満を広げることになりがちである。しかし志免町は、課題はあるものの大きな矛盾となっていない。その背景には、第１に、水道給水規制も断行（Ｈ１３年解除）するなど、受け皿が伴わない中での人口急増に毅然と対処してきたこと。第２に、下水道普及率が９割を超えるなどインフラ整備を着実に進めてきたこと。第３、に合併せず、小さな自治体として隅々にまで行政の光が届く関係性が構築されていることなどがあげられると考える。

また、救急病院や診療所などの医療機関が、人口が多い福岡市に近接し、地代（固定資産税も含め）が安く、まとまった用地確保が可能な志免町に進出していることで、町民の『安心』につながっている。

●本市に活かすべき点

・地域間で異なる住民構成を見据えた施策

本市同様、志免町も『人口急増』という要因によって、地域によっては高齢化率が４０％に到達する地区がある一方、児童が急増し、１０００人をこる学校が誕生している地域がある。

そういう中で志免町では、住民構成を背景に街づくり政策を変更するとともに、ニュータウンもいずれオールドタウンに移行することを深め、３０・４０年先を見据え政策立案が協議されていること大変重要だと考える。

・高額な医療費への対処

本市でも高齢者の高額医療費への批判や嘆きを議会でも行政でも聞くが、これは、長寿を喜べない議会・行政となってしまい、元気ではない高齢者は悪の根源ということにもなりかねず、プラス思考が失われてしまう。

志免町での『健康寿命の増進』と捉えることで、町内にある医療機関の取り組みや早期発見・早期治療の推奨と一体で、生涯教育等への取り組みを強めている。こうすることで、長寿を喜び合う社会（高齢者等弱者を大切にする社会意識の高揚）の推進にとどまらず、高齢者による高齢者のための積極的な社会参加を呼び掛けることができ、『健康』への意識を高める前向きな取り組みが町政も町民も自治会等の自主的組織も持てると考える。

・子どもの権利条例の制定

本市は、自治基本条例に子どもの意見表明権を位置付けているが、運用は一切されていない。一方志免町では、子どもの権利条例が制定され、理念だけにとどめず、権利委員会の設置、権利委員会による調査権や市民からの意見徴収権を持たせるとともに、救済委員会（議会の同意が必要）は直接子どもの声を聞き、助言でき、また必要に応じて勧告、是正要請、報告の公表ができるようにしている。さらに『子どもの居場所』を条例に位置づけ、自主性に基づき対応へ努力しようとしていることは、本市にすぐにでも活かせる点と考える。

■Ｈ２６年１０月２３日　福岡県飯塚市　e－ZUKA における産学連携の取り組みについて

飯塚市は、福岡市と北九州市に挟まれた地域として、車・飛行機・列車による交通アクセスが整っているもとで、①生業として成り立たなければならない商業（創業や経営）と学術的な連携（理想と現実）をどう図るのか、②学生の入学卒業・キャンパス移動があるもとで、地域の定着をどう図るのか、③飯塚市の取組（創業に向けたチャレンジ）をステップに、全国的・国際的な創業に対し、飯塚市が見据える方向性など大変興味深い。

●感想

全国的に実施されている産業誘致型事業は、とりわけ工業団地という公共事業にすり替えられ、ソフト面での取り組みは補助金だよりとおざなりになり、工業

団地の穴埋めだけに四苦八苦している自治体が数多くある。しかし、飯塚市では、インキュベーションセンター整備、e‐ZUKA トライバレーセンターなどハード面整備とどめず、商工部（産業振興課（産学連携室、企業誘致推進室）、商工観光課（商工係、観光係）、農林水産課（農政係、農林振興係、市場管理事務所）における人的配置、予算配分などソフト面での取り組みを継続している。

●本市に活かすべき点

・立場の違いを超えた商業振興への共同

日本経済全体が縮小していく中で、飯塚市では世界を見据え、シリコンバレー視察、スタンフォード大学（言語情報センター）との連携に議員も参加し、党派や立場の違いを超え、市政も議会も一体で協議・共同に着手できたことは重要な一歩となっている。

本市でも、市内の産業振興を口にしない議員はいないが、まだ党派の政策が優先され、一体感が欠けていることで、地域に根差した思い切った取り組みになりえていないのではないかと反省する。また、市内事業者が見据える方向と、行政の認識のズレが年々大きくなっているのではと考える。行政も議会も、産業振興政策は上からの押し付けではなく、現場から吸い上げる政策立案力の構築が急務ではないかと考える。

・学生とも事業者とも顔が見える関係づくり

飯塚市では可能な限り顔見知りの職員を配置することで、気軽に相談、相談内容の積み上げをスムーズにしていることは、転居等が多い学生にとっても安心感があり、創業・事業化への認識や課題を事業者・学生・市職員が共通認識を持てることから非常に重要だと考える。

・実態に即した創業支援

飯塚市では、創業前、工業時、創業後のフォローアップ体制も構築している。本市でも創業支援や国権補助の積極的活用に取り組んでいるが、学割（５００円／㎡）のあるオフィス貸出（事務机等）や、商店街空き店舗を活用した学生向けのチャレンジプロジェクトまではやっていない。まつりの実行委員会など行政のお手伝いで学生を利用するのではなく、学生の就労や夢の実現にわずかでも血肉になる取り組みへの脱却が必要と考える。商店街の空き店舗、森のマルシュエなど機会は本市でも十分あるため、あとは具体化だけと捉える。

・市民の自主的な取り組みを大胆に応援する

飯塚市の窓口においているチラシには、「介護なき戦い　６０才以上のダンス選手権（R60)」、「掘るホルモン　底がいい　掘るホルめし」など目を引く文句が記載している。本市も含め、「遊びはダメ」「ふざけすぎ」など行政的な意向が市民団体のチラシ（後援・補助団体）や内容を面白くないようにしているケースもある。

しかし、飯塚市は、『仁義なき戦い』をもじり「介護なき」とし、一般的には映画等での鑑賞できない年齢を記載することから、「R」の負のイメージを、「R60」とすることで、ターゲットを明確にし、「６０才以上だから参加できる」や「６０才を超えても元気にダンス！」を受け止められる仕組みにしている。

「掘るホルめし」は炭鉱時代の B 級グルメを各お店の創意工夫で現代版にアレンジし提供しているだけかと思いきや、形を丼や山型の盛り付けにし、『掘る』行為にこだわっている。さらに、一般的なイメージとして『炭鉱＝“黒”→見た目が悪い（“黒”の持つマイナスイメージ）→商品開発に役立たない』という負の連鎖を転換し、「何色にも染まらない黒（KURO)」「だからこそ、想像力は無限大」とし、新スイーツ「KURO SELECTION」を発信している。これらのことは単に市民的発想だけではなく、担当市職員も市民の感覚や“遊び心”をうまく業務に取り入れていると感じとれる。

本市でも自治会や NPO など市民活動は盛んであることから、飯塚市の視点を産業振興博や市民まつり、各種市民団体との関係性で築ければいい知恵（商業振興も含め）を引き出せると考える。